

平成25年度 関西大学 年史資料展示室 企画展

関西大学の秀麗たち

女子学生ものがたり



2013年4月1日(月) 開館

開館時間 午前10時～午後4時

場 所 関西大学千里山キャンパス 簡文館1階

休館日 日曜・祝日・大学が定めた休日

入館料 無料

関西大学の秀麗たち

女子学生ものがたり

年史資料展示室では、平成25年度の企画展として「関西大学の秀麗たち——女子学生ものがたり」を開催いたします。

本学で初めて女子学生を迎えたのは大正12年(1923)のことでした。平成25年(2013)は、それから数えてちょうど90年になります。

大正末から昭和初期にかけて、ごくわずか本学に存在した女子学生たちは、制度的には聴講生もしくは選科生という立場の人でした。しかし、この黎明期にごく少数存在した女子学生たちも、昭和10年過ぎには一旦姿を消してしまいます。

正式に女性の入学が認められるようになったのは戦後のことであり、急激に増えてくるのは大学紛争以後です。そして今や女子の在学人数は1万人を越す状況となりました。

今回の企画展では、大学昇格後の黎明期から現代にいたるまでの女子学生の歴史や、彼女たちを取り巻く社会環境などに焦点をあけるとともに、スポーツや芸能その他、さまざまな分野で活躍する女子学生や女子校友などの姿も紹介いたします。

1. 女子学生受け入れの伏線となった語学講習会

大正7年(1918)、大学令の公布に伴い、国内の大学は次々と昇格していった。関西大学も懸命の努力を重ね、大正11年(1922)6月5日に悲願であった大学昇格を果たした。これに伴い、本学首脳陣は新たな取り組みを展開した。その一つに「語学講習会」があった。

大正12年(1923)夏、学外の社会人を対象として開かれたこの講習会は「男女を問わず入会を許し、女子聴講者には特別席を設け、希望者が多いときは別に女子部を置く」として受講生を募ったため、昼間・夜間あわせて539名の受講申し込みがあり、そのうち女子聴講生は54名を数えた。その後、「語学講習会」に続いて開催された「日曜自由講座」も女性に解放された。

そして、これらの講座への女性の積極的な参加は、「大学は男だけ」とする制度に再考を迫ることになった。このあと、複数の女性たちが聴講生、選科生として本学へ入学してくるが、それは、こうした講座が伏線になった。



第1回夏期語学講習会参加者(大正12年)

2. 黎明期の女子関大生たち

大正12年(1923)10月、本学初の女子学生・北村兼子が聴講生として本学に入学してきた。しかし、この先駆者となった北村のあとに続いた学部女子聴講生はあまりにも少なく、多く見積もっても十指に満たない。

一方、夜間の専門部女子学生第1号となったのも北村と永井美枝の2人であった。その後、記録上では7人ほどの女性が専門部で学んだとされているが、それも昭和の初期で途絶えてしまう。

当時の社会では、「女に学歴などいらない」という意見が多数を占めており、働きながら夜、男子学生と同じ場所で学ぶことは、到底理解されるものではなかった。しかし、それだけに、夏期語学講習会や日曜自由講座、さらには聴講生、選科生という形で本学が男女共学制を実施したことは評価されるべきだろう。



独法科の例会に出席する北村兼子

3. 戦後の女子学生たち

長い間女子の進学を阻んでいた制度上の壁を取り払ったのは、昭和20年(1945)12月の「女子教育刷新要綱」であった。

これにより、本学も学部の入学資格に高等学校高等部、女子専門学校、女子師範学校の卒業者を加え、昭和21年度から実施した。その結果、法学部に1名、翌年には予科、専門部にも女子学生が入学してきた。

しかし、初期の女子学生は数が少なかったため、多数の男子学生に混じって戸惑いや気苦労も多かったようである。反面「選ばれた」という自負心から向学心に燃えていた。男女同権、女性自立への関心が高まっていたことがうかがえる。

4. 増加する女子学生たち

その後も女子入学人数は増え続けたが、女子学生の姿が目立ってくるのは昭和40年代後半のことである。

そして現代。平成24年(2012)4月に刊行された「大学ランキング2013」(週刊朝日ムック)によると、本学の女子学生数は10951人。日本国内で1万人を超える女子学生を擁する7大学のうち、日本大学(19897人)、早稲田大学(15186人)、立命館大学(11794人)について4番目に女子学生が多い大学となっている。男女の比率で見ると、立教大学(51.7%)、関西学院大学(45.7%)について第3位(39.3%)である。

キャンパスで見かける女子学生の笑顔は明るく、華やかである。毎年、2500人あまりの女子学生が社会へと羽ばたいているが、さまざまな分野で活躍している。黎明期、わずか10人ほどしか存在しなかった女子学生が、今や1万人を超え、在学生の3分の1あまりを占める状態になった。キャンパスも大きく様変わりしたのである。



大学外苑で行われた女子学生と卒業生たちの親睦の集い(昭和27年4月)



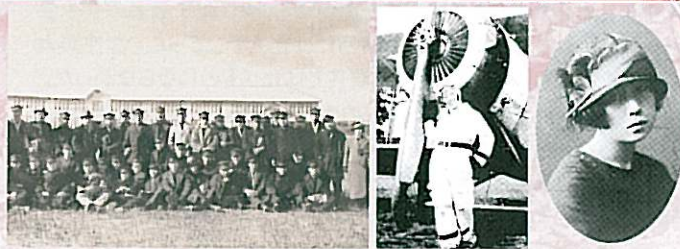
元気あふれるチアリーダー

女子学生の移り変わり

1. 関西大学女子学生第1号 北村兼子

本学に学んだ最初的女子学生は北村兼子である。大正12年(1923)10月、聴講生として入学し、千里山で男子学生たちに混じって授業を受けた。大正15年(1926)の学部卒業アルバムには北村の写真が数枚見られることから、聴講生ではあるが、学生間では同期生の一人として認められていたようである。

北村は、在学中から朝日新聞の記者としても活躍。女性の地位向上をめざし、海外での婦人会議に日本代表として出席した。昭和6年(1931)7月に27歳の短い生涯を閉じたが、飛行学校でパイロットの資格も得ており、生きていれば同年8月にヨーロッパへと飛び立つはずであった。北村の活躍は、当時の活動的な女性の中でもずばぬけていた。



2. 黎明期的女子学生

本学が女性に門戸を開く伏線となったのは、大正12年(1923)夏に開催された「語学講習会」や「日曜自由講座」であった。これらの講座は、男女を問わず募集したため、女性の積極的な参加があり、結果的に男女共学を認める契機となった。

学部(昼間)だけでなく、専門部(夜間)の女子学生第1号となったのも北村である(永井美枝も同時入学)。昭和2年(1927)には伊藤アヤと小西千代寿の入学も続いた。2人の入学は、「関大の学窓に咲いた名花二輪」と題する新聞ニュースになるほどであった。

経済的な理由などで高等女学校へ進学できなかった女子学生が、働きながら夜間の専門部に入学したことは大きな意味を持つが、特別扱いの存在である聴講生や選科生は、所定の学課を修めても、正規卒業のような資格や特典は与えられなかった。



3. 新制大学初期的女子学生

本学で正式に女子学生の入学が認められたのは戦後になってからである。

昭和20年(1945)12月、「女子教育刷新要綱」で大学の男女共学が決定されると、本学も直ちに女性に門戸を開き、翌年、初めて女子学生が1人、法学部に入学してきた。

昭和22年(1947)には予科、専門部でも女子の入学が続いたが、その後の増加の幅は小さかった。昭和31年(1956)の経済白書に書かれた「もはや戦後ではない」という言葉は流行語になったが、その前年の3月時点でも女子学生数は1部、2部あわせて125名と、全学生の1パーセント強にしか過ぎなかった。



4. 学園紛争からオイルショックにかけての女子学生

昭和47年(1972)ころは、昭和44年(1969)に吹き荒れた学園紛争の嵐が一段落し、昭和48年(1973)にオイルショックで日本中が大騒ぎになるまでの比較的穏やかなときで、文学部や社会学部などで女子学生の数が増えたことから、キャンパス全体に華やかさが増してきた時期でもある。

ファッションの世界では、学生運動とともに普及し始めたTシャツとジーンズが定着する一方、ミニスカートがはやり、流行のファッションでキャンパスを歩き交う女子学生の姿が目立った。



5. バブル時代的女子学生

昭和61年(1986)12月から平成3年(1991)2月までの51ヵ月間、日本では「バブル景気」に見舞われた。地価や住宅の高騰、消費ブームの過熱など、さまざまな社会現象が起り、「DCブランド」や「ワンレン・ボディコン」と呼ばれるファッションに身を包んだ若者が闊歩した。

千里山キャンパスでも、ストレートの髪でフロントから後ろまでを同じ長さにも真直ぐ切り揃えたワンレングスの女子学生が数多く見られた。彼女たちは流行に敏感であるとともに、取り入れるのも上手であった。



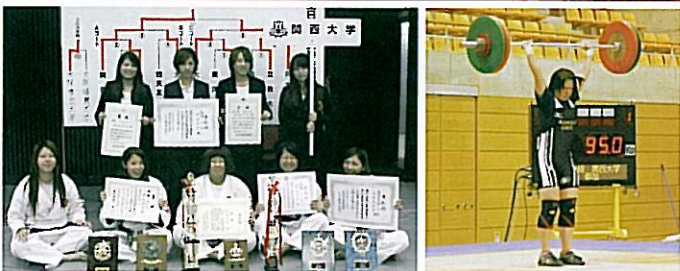
6. 活躍する女子アスリートたち

「強い関西大学」のスローガンのもと、近年は女子アスリートたちの活躍がめだつ。

平成24年(2012)を中心とした最近の戦績を一例とすると、フィギュアスケートでは、村元小月選手が日本学生氷上競技選手権大会で優勝。拳法部の女子は団体戦で全日本学生拳法選手権大会を連覇するとともに、鈴木佑帆選手が全日本拳法女子個人選手権大会で優勝した。さらに射撃部の女子も日本学生選抜ライフル射撃選手権大会で総合団体優勝した。

空手道部では、清水希容選手が全日本学生空手道選手権大会と世界大学空手道選手権大会の女子個人形の部で優勝。重量挙げ部では山本優子選手、尾崎都加選手、井上聡美選手、柏木悠里選手がそれぞれ全国大会での優勝を果たしている。

しかし、これらの戦績はごく一部であり、栄光の記録は今後も積み重なっていく。



7. 現代的女子学生

現在、日本の大学のうち、1万人を超える女子学生を擁する大学は全部で7大学。そのうち、女子学生数で言うと関西大学は日本大学、早稲田大学、立命館大学について4番目に多く、男女の比率で見ると立教大学、関西学院大学について3位となる。

かつて、「パンカウ」で硬派のイメージが強かった本学は、今や女性の多い華やかな大学へと変身した。明るく近代的なキャンパスは、今後も女子学生によって大きく変化していく。



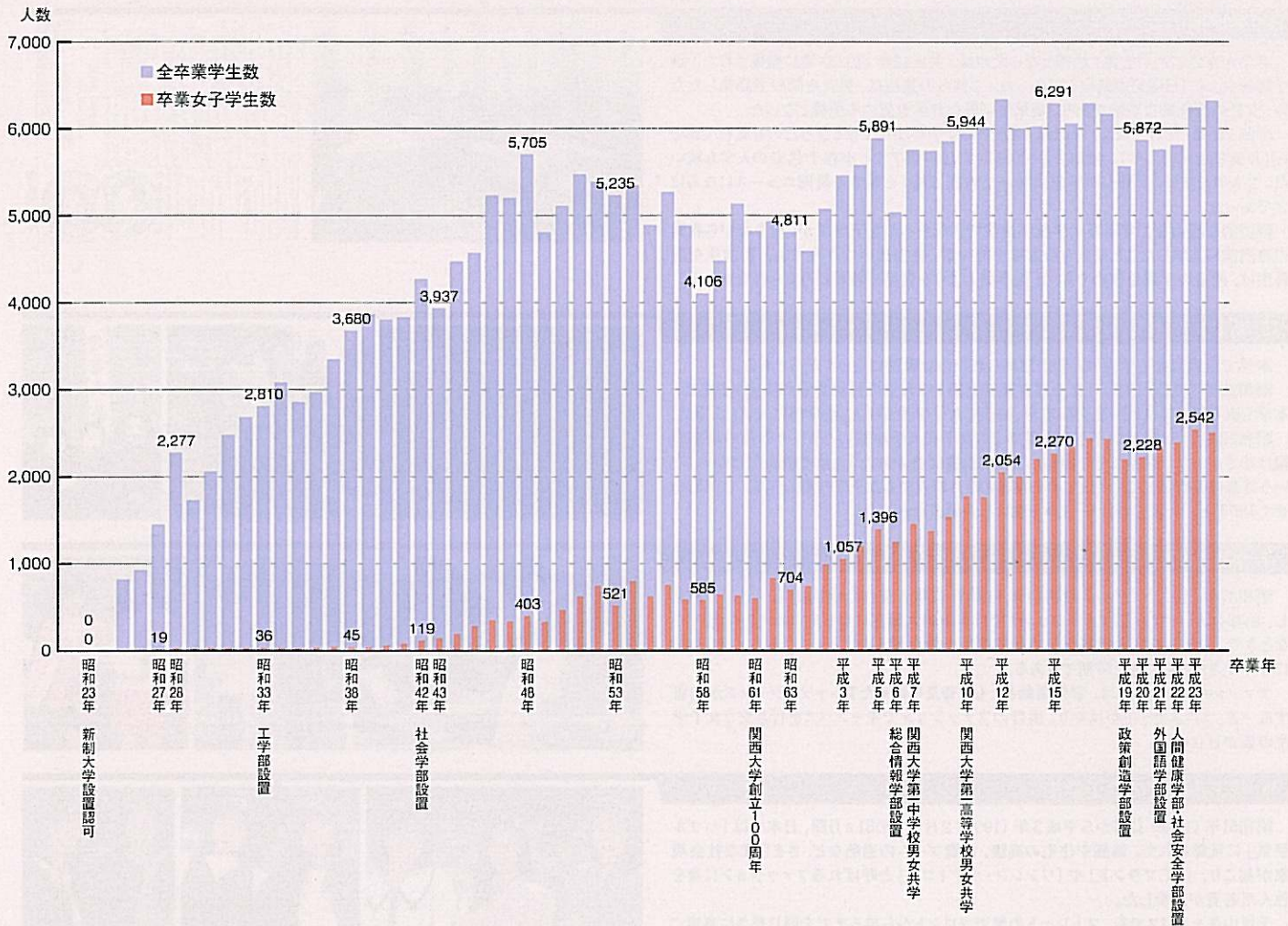
卒業生数から見た女子学生の推移

大正末、女子学生の入学に門戸を開いた本学には、十数名の女子学生たちが入学してきたが、昭和の初期には絶えてしまった。女性が大学で勉強を続けることの大変さは、現代とは比べものにならない。

戦後、教育制度が改正され、女性の大学入学が正式に認められるようになったが、それでも昭和20年代、女子大学生の存在は珍しかった。昭和27年（1952）、新制大学初の卒業生のうち女子卒業生は19名であった。

女子卒業生数が100人を超えたのは昭和42年（1967）で、119名。その後、着実に増えながら、昭和50年代には毎年600人前後の女子学生が卒業するようになる。

1000人を超える女子卒業生が出たのは平成3年（1991）で（1057名）、9年後の平成12年（2000）には、ついに2000人を突破した（2054名）。そして平成23年（2011）には2542名を数え、4学年あわせると女子の在学生数が1万人を超えるようになったのである。



関西大学年史編纂室

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35

関西大学千里山キャンパス 簡文館内

【TEL】 06-6368-1062 (直通)

【URL】 <http://www.kansai-u.ac.jp/nenshi/>